

＜質疑応答・意見交換＞

さまざまな事例をご紹介いただきました。今、話題に上りましたので、象徴的だったのでコメントをさせていただきます。「スポーツイベントが地域に何をもたらすか」ということが今回のテーマです。まず頭に浮かぶのは、経済的なものとか観光とか経済活性化という感じがしますが、今、西様からご説明があったような地域の機能の開発にも恐らくスポーツイベントは有効なのではないかということがすごくお分かりいただけたのではないかなと思います。そういう意味ではCASEのプロジェクトですけれども、経済とか活性化だけではなくて、地域住民のつながりとかそこから何が生まれてくるのかということをテーマにしていたら、すごく全国的にも参考になるようなプロジェクトになるのではないかなと思いました。

それでは、時間も限られていますので、ざっくばらんにこういうことを聞いてみたい、ああいうことを聞いてみたいというのがございましたら、どなたかご発言をお願いいたします。どうぞ。

吉住：奄美大島の横の喜界島という小さい島がありまして、その喜界町役場企画観光課の吉住と申します。中道さんにお伺いしたいのですが、いいですか。できる範囲でいいですが、鹿屋市の補助金や参加料と協賛金の割合というのが大体どれくらいかというのを教えてください。それから宿泊者を増やしていくにあたって、今、現在宿泊のキャパシティが足りているのかということと、もし足りなくなった場合の対応とかをお考えでしたら教えていただきたいと思います。

中道：ありがとうございます。今、市からの補助金が130万円です。参加料はSPコースが4000円、Aコースが7000円、Bコースが5000円で、昨年より1000円ずつ上げています。先ほど参加費には不満が出ていましたが、多分あれが結果が悪ければ私はここに呼ばれていないと思いますので、結果が良くて良かったです。あとはゼッケンに企業名を入れて、4社ぐらいに頼んでいます。4で割って人数分ゼッケンをつけているという形で、各社5万円ずついただいているのが協賛金です。あとは青果市場からフルーツをもらったり、フルーツとか飲み物とかこまごましたものはありますが、大まかなところは市の130万と参加費と一部協賛

金で賄っています。あと、宿泊は、先ほど説明したとおり、まだ宿泊につながっていないですけど、一応ツール・ド・おおすみ開催前後はすべてホテルは満室というお声はいただいています。

吉住：もし今後宿泊が増えた場合には、どういうふうに宿泊させるかという対応はまだ考えられていないのですか。うちの島は、今、慢性的に宿泊キャパシティが足りなくて、それが課題になっていまして、今後どういう対応をされるかというのがもしあればお伺いしたいなと思います。

中道：1回話し合ったのは、市の持っているログハウスとか、これも行政ですが、後援にも入っている少年自然の家とかです。今は民泊などもはやっていますが、なかなかそこは難しいのではないかと1回話に出たことはあります。そういった状況です。

吉住：ありがとうございます。

工藤：あわせて菜の花マラソンのほうで、急に参加者が増えてきた時期があるので、そのときに、どうぞ対応されたかが参考になるかと思います。

西：いぶすき菜の花マラソンが2万人のときは、本当に宿泊施設がなくて、われわれのほうからは公民館の開放それから民泊は当時はないですけども民家に受けていただくということをしました。結構いらっしゃいます。私も旅館・ホテルですから、ホテルの布団を公民館に取りに来てもらって、運んだこともあります。かなりの方が公民館を利用されます。今はそれが過剰気味におもてなしされるものですから、夜、焼酎を飲み過ぎて朝二日酔いで走っている方もいらっしゃいますが、地元の方とのふれあいを楽しみとしてそこが定着している選手の方もかなりいらっしゃいます。グループで来ている方々もいます。

坂口：私からも追加で情報提供させていただくと、霧島のほうでトレイルランのイベントがあります。トレイルランのイベントで参加される方々が、キャンプ場のテントで宿泊しているという実態もあります。なので、イベントの内容によってはそういう形で本当にテント泊でも参加される方がいらっしゃるということは

追加でお伝えしておきます。

吉住：ありがとうございます。

坂口：その他、いかがでしょうか。

黒川：自転車部の監督をしています黒川といいます。僕も今はこういう体型ですが、昔、菜の花マラソンを3時間10分で走った実績を持っています。その際は大変お世話になりました。最近になって、菜の花マラソンの総参加者数が減ってきている大きな要因の一つが鹿児島マラソンという、近くで大きいイベントが開催されるというのも一つあると思いますけれども、それ以外に何かこういうのがあるかもなのというのが、見当が付くようであれば教えてください。それから、少し今、内訳を見たときに、大きい数ではないですが、外国のお客さまが結構増えてきているような数字が挙がっているのです。そういったところをあえて狙ってそういうところにもアピールしながら外国の方々の集客というの何か働き掛けていらっしゃるのかということをお教えください。

西：昨年、36回大会が1万5000名でしたので、私どもはこれからある意味もっと増やさなければいけないという中で、実は今年が連休ではなかったです。連休の次の週でしたので、非常に減るだろうという予測はしていました。それでこれからは海外にということで、実はこれプラス中国から35名来ていただいています。初めてでしたけれども指宿から上海 RUN に行きまして、そこでアピールをしました。こちらでいうランニングみたいなものがありますが、そこでアピールしたら35名が来て、走ってもらいました。来年もまたこちらも行くし、向こうからも来てもらうという約束をしました。これがアジアに向けて、特に台湾とか韓国含めてそうですけれども、そういった海外に向けてのアピールはやっていこうと思っています。とにかく1万5000名を超えると警察から管理をきちんとするようにクレームが来ます。下がると今度は経営に支障を来すものですから、われわれがなぜ基金を持ったかといいますと、1人何かあって発送すると100円です。2万人いたら200万、1万人でも100万かかります。だからこういったリスクを誰が背負うかとなると、市は補填してくれませんので、実行委員がしっかりと対応し

ないといけないということで、とにかく基金をあるうちに200万ずつ毎年積み立てるということをしていきます。それで東北に200万円震災のときに義援金で送りましたので、800万あったのが取り崩したので、これまた上げるためにはということで1000円お願いして参加費を6000円にさせていただきました。

黒川：ありがとうございます。

工藤：今、観光庁と、あと JSTA という団体があって、日本スポーツツーリズム推進機構というところが、ランニングが一つの日本の外国人観光客を呼ぶためのツールになるだろうと盛んに外部で宣伝をしています。ようやくこういうのがあるというのが、台湾は今特にランニングブームが訪れていますので、それで日本に来る方も増えているというのが一つと、ただ、一昨年、陸連登録のマラソン大会の事務局がどのぐらい外国人を把握しているのかというのを調べましたが、ほとんど把握していませんでした。それが日本に居住している外国人なのか、海外から実際に来た外国人なのかも残念ながら分からない、大きな都市マラソンはほとんど把握していますが、特に地方のマラソンはほとんど把握していないというのが現状のようです。一方、外国人はどうやって調べてくるかというと、日本の観光庁がホームページを一生懸命英語で作っていますが、そこはほとんど見ていません。大会自体が英語あるいは中国語のホームページを持っていれば、まずそれを見るそうです。それがない場合には、海外で有名なランニングマガジンとかを見たり、あとはスポーツエントリーさんがようやく英語のホームページをつくったり、あとはランナーズさんが海外の組織と提携して英語の大会紹介を始めましたので、そういうところを見ているようです。ですから、まずは自分の大会の英語あるいは多国籍の言語のホームページを開くというのが非常に有効だというのが分かりました。補足でした。

原田：西さんにお聞きしたいのですが、参加者ピークが21400人となって、その翌年にくくと落ちていきますけれども、これはコースを変えることはないのでしょうか、これまでの10キロマラソンとかそういうのをやめたとかそういうことがあるのかどうか。それとも、今、都市部、鹿児島市でやっているから減ってい

るという話がありましたけれども、工藤先生から先ほどマウイの2日間にわたって小距離・中距離と合わせて翌日にハーフとフルをやるというような話がありましたが、運営的にそういうのをもしやるとしたら可能なのかどうかという、その辺はどうなのでしょう。

西：まず、落ちたのは10キロをやめたからです。これは、警察からの指導もあって、2コースは管理ができないと、警察もどんどん人を減らしていますので、できないということで指導があって、もうある程度1万5000名以下にしてくれと言われたのも事実です。もう今は東京マラソンは別にして大体1万人～1万5000人ぐらいの参加者が参加者料金も含めてみなさんが目指すところだと思います。

それから複数ですけれども、可能かもしれません。実は指宿のイベントは観光協会に全部来ています。これを担当を決めてやっています。ウォーキングから何からもうすべてを実は観光協会がやっています。どこの観光協会よりも人は多いと思いますけれども、社団法人ですから、そこから実行委員会から多少お金をもらいながら協会運営をしているということです。逆にこういったイベントがないと人を減らさないといけないうことはありますけれども、今の組織で行くことができるとわれわれはできるのではないかと思います。

工藤：分かりました。ちなみにマウイは人数を増やさないことで逆に2日間プログラム提供をしています。具体的にいうと、3000～4000名の参加者に限定しています。これ以上増やすとマウイの地域らしさがなくなってしまうというのが一つの理由です。日本はどうしても右肩上がりに参加者が増えていくということをやしとするところがありますけれども、キャパシティーというのをあまり考えていないという現状もあるので、この辺りがひょっとすると差別化の一つの方法かもしれないという感じはします。

黒川：中道さんが言われてもいいと思いますが、私もツール・ド・おおすみに第1回から関わっていて、実はスポーツエントリーで出すと、結局定員を800ぐらいに決めていくと、事前にSold outというかいっぱいになってストップがかかるような状況で、お陰様で人気のイベントになっていますので、もっと数を増やすという手もありますけれども、増やし過ぎるとやは

りサポートできる数に限界があります。例えば当日一緒に走るサポートライダーの鹿屋体育大学の学生たちが1人で面倒を見るお客さんの数がすごく増えてしまうと、何となく交流ができないというところでクオリティーが下がるというところもあって、800ぐらいだったらなんとかなできるだろうというところで、実行委員会のほうで安全性も見てというところでやっていると、これが正しい数字なのかどうかというところは、われわれも疑問で、今回アンケートでかなりそういうところに皆さん満足をいただいているというデータが挙がってきたので、一つの指標として正しかったということですので判断の材料の一つになったと思います。余談でした。

工藤：その辺りはどうですか。今後増やしたいということはあるですか。

中道：私も実行委員長をやる以上は、人数が増えて大々的にやりたいという思いはあります。実行委員会の各メンバーの中で、一番は黒川監督が今言われた安全面、あとはサポートライダーが20名に1名が最低キャパシティーというところで、それ以上に人を呼ぶのであればサポートライダーを増やす必要があります。

工藤：キャパシティーは意外と重要だと思います。それによって差別化やプレミアム間を創出できることがあります。パタゴニアというスポーツ用品メーカーがありますが、あそこは金額が高いです。ですが買う人はパタゴニアの自然環境保護の考え方にすごく賛同して、ナイキじゃない、ミズノじゃない、アシックスじゃない、パタゴニアならお金を出して買いましょうという人たちを商売相手にしています。ですから、イベントも誰でも彼でもではなくて、逆にその人たちがどのぐらい満足するかということに重きを置くというのも一つの視点なのかなという感じがします。プレミアム感という感じもします。

西：少しいいですか。スポーツイベントをやる上で、非常に参考になるのが今回の出水ツルマラソンです。大会の確か2週間だったか10日ぐらいで実は開催をやめました。その理由が衆議院の解散総選挙が重なったからです。私も参加料を返金するという情報があつた

段階ですぐに飛びまして話を聞かせてもらいました。全部参加料を返しています。それから宿泊もいっぱいになったのがゼロです。宿泊施設もゼロでした。そしてびっくりしたのが、県内が3分の1であとは県外だったそうです。3000人ぐらいの3分の2の人たちが、飛行機の座席を早割で取っていますから、当然キャンセル料がかかります。それも返すと言っていました。いくらぐらいの損害金ですかと聞いたら、300~400万円かと聞いたら、1000万を超えるでしょうと言っていました。そういうリスクをはらんでいるということです。綾マラソンは同じ日でしたがやりました、出水ツルマラソンはやめました。なぜやめたかという、1回やめた経験もあるという強みもあったでしょうけれど、実は沿道・走るコースが投票所に重なっているということもあって、警察あるいは行政とボランティアのことも含めて話をしたら、とてもじゃないけれど多分できないということで事前にキャンセルをし、参加費も全部お返しをして、飛行機のキャンセル料も来た分自体を払ったという話をされていました。そういうリスクもはらんでいるということを考えながら対応しないと非常に難しいイベントでもあるということを頭に入れたほうがいいかなと、これも大いに参考になりました。

工藤：大変短い時間でしたが、中身も非常に濃い、質問もたくさんあったのではないかなと思います。日本ではスポーツイベントを実際に年間6,000件、細かいものまで含めて考えますと7,000件程度が普通に開催されているそうです。平日にはできませんから、それが土日や複数の休日に集中するわけです。そうすると、どのイベントに参加しようか？というのがどうしても出てきます。今、期待されているのは、地域外や県外、外国から来る人がたくさん参加してお金を落としてくれればいいという発想ですが、今お二方の話を聞いていると、地元の方が半分ぐらいは参加されて、そのほかの方も来るけれども、というところが一つのポイントのような感じもします。

スポーツツーリズムという言葉が普通に使われ始めてはいますが、研究をいろいろやって分かってきたことがありまして、どうやらスポーツ参加者だろうということが大前提です。スポーツツーリズムと言ってしまふから旅行して観光してお土産を買ってくれるような印象がありますが、皆さま恐らく何となく実感され

ていると思いますが、スポーツ参加者は儉約志向です。悪い言い方をすれば、少しケチで、どこに泊まるでもなく自分の車に寝泊まりして、イオン辺りで少し安くなった弁当を買ってきて、すごい人は野外用品のガスコンロまで持っていて、自分の車の中で調理をして食べて、朝走って渋滞になるのがいやなので、さっと帰ってしまうという、こういう人たちが結構な割合でいます。そうすると、スポーツイベントをやって旅行者に来てほしいのに、開催する側との思惑とはすれ違いが起きてしまう可能性があります。逆にいうと、タイムが出やすいマラソンコースをつくれば、そういう人がたくさん来てくれるかもしれません。一方、せっかく行ったのだから温泉に入って地酒飲んで、何かおいしいものを食べて、お父さんが走っている間、家族は観光しておこうというような方々も実際には存在します。そうすると、実際に地域でどんな人を呼びたいのかというところが実はすごく大きな問題になってくるということです。

あとは同じような内容、目的のスポーツイベントを同じ市内や県内で開催しているときがあります。この辺りをスポーツ参加者や来訪者の同じ情報のはずなのに誰が収集・整理しているのかという問題があります。先ほどお伺いしたらお二人が県内でどんなイベントをやっているかとか、時期的に重なっていないかとか、そういう調整をされているそうです。その辺が行政の方で情報を集約したものがうまく割り振られるとか、あるいはどんな人たちがどれぐらい年間地域に来ていて、どのイベントのときにすごく増えるとか、こういうときには減るとか、こんなイベントができるのではないかと、そういうことにもつながれるとお互いにいい情報を有効活用できるのではないかと感じました。

短い時間なのでまとめようがありませんでしたが、これからスポーツイベントが増えてくる中で、どう差別化するかというのは、一つのポイントかと、ただ参加者を増やすだけではなくて、どう満足してもらうかというのも差別化の方法の一つです。そのようなことをお二人の事例には学ばせていただいたと感じました。簡単ではございますが、まとめとさせていただきます。

坂口：ありがとうございました。これで質疑を終わらせていただきます。

時間ももう過ぎてしまいましたが、簡単にこの会の内容をまとめさせていただければと思います。今回この協力者会議のテーマを決定するにあたって、CASEプロジェクトというプロジェクトがきっかけになっています。来年以降もツール・ド・おおすみの調査を続けていく予定で、今、どのような内容で研究を続けていけば、より有効なフィードバックができるかといったようなことを研究者の中で話し合いをしています。一方で、今日参加していただいているのは自治体の方が多いかと思いますが、今後、もしこういうデータがほしいであるとか、そういったようなことがあれば、こちらのほうに相談していただければ、もしかすると何らかのかたちで協力できるかと思っています。

スポーツイベントといった場合に、今はランニングイベントがブームです。多分10年後、20年後を見据えたときに必ず種目のトレンドが変わってくると思います。今はいいけれども、次に、はやらなくなったときにどうするのかということを考えたときに、先ほど工藤先生からお話があったようなイベントをどのようにして継続していくのかという持続可能性の問題というのが当然出てくると思います。飽きられないようなイベントをつくるためにどうするのかという問題と同時に、飽きられないための参加費の設定の仕方であるとか、あるいはどういう目的でイベントを開催するのかという、かなりマーケティング志向の強いイベントの企画・運営が求められているというのが、今日会議を開いてみての私の感想でした。

以上をもって平成29年度鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センターの協力者会議を終わります。今日、協力していただいた中道さん、西さん、本当にありがとうございました。もう一度拍手をお願いします。

本日はお忙しい中ご出席いただきまして、ありがとうございました。